

田中澄江

女殺油地獄



現代語訳 日本の古典 17

女殺油地獄

田中澄江

学習研究社

女殺油地獄

心中天の網島 国性爺合戦
堀川波鼓 鍵の権三重帷子

田中澄江
5

心中天の網島

近松の心中もの	12	河庄に行く小春	12
からむ太兵衛	16	心ふさぐ小春	19
愛想づかし	20	逆上する治兵衛	22
治兵衛の誓詞	26	おさんの告白	29
女同士の義理	31	涙の離縁	33
名残りの橋づくし	39	死出の旅路	36
		網島の心中	40
		兄の意見	24

女殺油地獄

野崎詣り	44	お吉の意見	44	大喧嘩	46
お茶屋の二人	51	義父の嘆き	54		
与兵衛の策略	57	母の怒り	60	親の情	63
与兵衛の無心	65	油の地獄	69	血染めの割付	70
与兵衛捕らわる	72				

国性爺合戦

海外へのあこがれ	74	美女を求める使者	75
押し寄せる韃靼軍	77	和藤内の船出	78
千里が竹の虎退治	81	親子の名乗り	86
錦祥女の嘆き	88	紅流し	90
		住吉の童子	93



呉三桂の登場	94
捕らわれた父	96
国性爺の活躍	97

堀川波鼓

留守居の妻	100
鼓の師匠	101
酒の接待	104
横恋慕	107
ひとつ床	109
取られた袖	110
夫の帰国	112
妹の意見	113
不義の詮議	116
お種の自害	119
祇園祭	120
踏み込み	123
止め刺し	124

鎗の権三重帷子

二つの姦通劇	128
お雪の恋慕	128
ライバルの二人	131
母と娘	132
娘婢の誓い	134
おさいの嫉妬	136
証拠の帯	138
誠の不義者	140
女敵討ち	146
つらい旅立ち	142
乗合船	145

特集口絵 日本の人形芝居 三隅治雄

解説	近松門左衛門の世界	諏訪春雄	157
エッセイ	近松にみる悲劇性	ドナルド・キーン	162
エッセイ	文楽の魅力	山田庄一	166
芸談	義太夫語りの舞台話	竹本津大夫	170
古典の旅	近松作品の旅	神谷次郎	174
■近松名作小事典			176
■図版目録			178

◆原文

河庄に行く小春(心中天の網島)	15
治兵衛に恨みごとを言うおさん(心中天の網島)	29
小春治兵衛の死出の道行(心中天の網島)	39
涙で与兵衛を勘当する母(女殺油地獄)	59
お吉を刺し殺す与兵衛(女殺油地獄)	68
虎を退治する和藤内(国性爺合戦)	83
わが身を刺して紅を流す錦祥女(国性爺合戦)	91
留守の夫を恋い慕うお種(堀川波鼓)	103
思わず誤ちをおかしたお種と源右衛門(堀川波鼓)	111
娘に権三との縁談を勧めるおさい(鎗の権三重帷子)	133
乗合船で発見されたおさい権三(鎗の権三重帷子)	147



編集委員

井上 靖

田 地 文 子

尾 崎 秀 樹

山 本 健 吉

(50音順)

女殺油地獄

心中天の網島 国性爺合戦
堀川波鼓 鎧の権三重帷子

田中澄江





女殺油地獄・お金を無心に来て隣家の女房お吉
を刺し殺す与兵衛 「ア、此方様は小気味の悪
い。必ず側へ寄るまい」と、跡退りして寄る門
の口……。右手より左手の太腹へ、刺いては扶
り抜いては切る……。目前油の地獄の苦しみ。







持元、母三付



持元、母三付
曲五、國金





梓えぬ二付
曲五団全

時
重

金
重



梓えぬ二付
曲五団全

時
重

人形遣い図 歌舞伎役者が劇中で人形を遣っているところ。
人形の遣い方は、三人の遣い手が一体の人形を扱う現在の文楽の方式とは違って、一人一人遣いであり、しかも人形の背から片手を差し込む方式で、近松時代の人形操法をさながらに示している。安政元年（1854）12月刊。三代歌川豊国画。

薄雪 鏑木清方筆。1917年の作。「心中
中天の網島」「曾根崎心中」となら
ぶ近松の傑作心中物「冥土の飛脚」
をテーマとしたもの。愛の悲しさが
ただよう。福富太郎コレクション蔵

心中天の網島

しんじゅうてんのあみじま



近松の心中もの

近松門左衛門が、実際におこった事件をもとにして、はじめて
心中もの「曾根崎心中」を書いたのは、元禄十六年（一七〇三）、
將軍綱吉のころである。

内本町平野屋の手代徳兵衛と、天馬屋の遊女お初とが、この
世の名残り、夜も名残りとはかり、手に手をとって、梅田橋を
わたり、曾根崎の天神の森で、男が女ののどを脇差で刺し、お
のれは剃刀でのどを貫いて相對死にをとげたことは、大阪の町
じゅうの評判になり、近松がこれを人形浄瑠璃の台本に仕上げ
ると大当たりをとった。

そのとき近松は五十一歳。その舞台に魅入られたように、大
阪の町なかでの男女の心中がつづいたという。

お初と徳兵衛の心中のあとは今、お初天神となつて、梅田の
繁華街のまんなかに、往時の悲劇を語っているが、かつての蜆

川の名残りを示す路地も、その近くにある。埋めたてられてい
るけれど、その道の曲り具合が、いかにも川の自然の流れをし
のばせている。

享保五年（一七二〇）、近松は「心中天の網島」を書いた。
六十八歳の円熟した彼は、「曾根崎心中」にはじまった近松の
「心中物」の中で、構成といい、登場人物の心理のあざやかな
描きわけ方といい、もつともすぐれていると言えるのではない
だろうか。

舞台も「曾根崎心中」と同じく、大阪の北の歓楽街である。

河庄に行く小春

曾根崎新地は底知れぬ恋の大海のように、遊女たちが、情け
を売る土地として名高く、蜆川をはさんで、灯ともしごろとも
なれば、女に慕いよる男があとを絶たない。

立ち並ぶ廓の一軒に紀伊の国屋があった。その抱え妓の小



妓と行き会う小春 足どりも重く、
わびしげに歩く小春（左）に、妓は
親しげに声をかける。いとしい治兵
衛に会うこともままならぬ身の小春
は、顔もほっそりと、やつれ気味。



春は、島の内うみで湯女ゆめをしていたのが、近きごろ新地しんちにつとめをか
えて来たのである。小春というのも何となく仕合せしあわせのうすそ
うな名であるけれど、これが、その秋の十月には、紙屋治兵衛かみや じへいゑと
の心中騒動で、世間に評判をたてられることになった。

その夜、だれによばれたのか、小春はひとりわびしそうに行
灯よちの光をさけて、うす暗がりの道を歩いていた。

すれちがった妓きが、ふりかえりざま呼びとめて、

「小春さん、まあ、このごろとお座敷であうこともなく、

どうしていることかと案じていました。からだの具合でも悪い
のか、ほっそりしてやつれて見える。紙治かみぢさんで御苦労とかい
う者もあるけれど、本当なの」

親しげに身をよせて、あれこれ問いただそうとした。

店で、めったな客にあわせようとしないとか、伊丹いだんの太兵衛たへいゑ
が請け出すとか、小春についてのうわさは本当か。

小春は首をふって、

「伊丹いだん、伊丹いだんと言わないで。その言葉だけで病やみついてしまっ
お気の毒な紙治かみぢさん。わたしとの仲など、たいしたことない
のに、あのわがまま者の太兵衛たへいゑが浮き名をつくって方々にふり
まいたので、おかげでわたしのお客がみんな遠ざかってしまっ
たの」

お店ではこれも紙屋治兵衛かみや じへいゑのせいだと邪魔いづまをするので、便り
も出せなくなってしまうた。

しかし今夜は、侍さむらいの客があるとかで、これから河庄かわさださんによ
ばれて行くところだと話し、こんなひまにも、あのうるさい太
兵衛たへいゑにあわないかと心配で、まるで仇あだにつけねらわれているよ
うな身の上といえば、妓きは同情して、

「それなら早く身をかくさなければ。ほら、あすこに念仏坊主ねんぶつぼうしゅ
がやって来る。見物の衆にまじって、伊達いだてを気どりたいやらし
い姿は太兵衛たへいゑさんにちがいないわ」

という間もなく近づいて来た、ほうろく頭ほうろくがしらの生ぐさ坊主なまぐさぼうしゅ。
墨染すみぞめの衣えの袖そでを太いたすきでまくしあげて、見物をぞろぞろ
したがえ、ふざけた念仏歌ねんぶつうたを歌いながらやって来た。

道具屋節どうぐやふしやら、文弥節ふみやふしやら、与作よさくおどりの中の歌の文句を歌
いあげる。



河庄に行く小春(冒頭)

さん上ばっからふんごろのつころちよつころふんごろで、まてとつころわっからゆつくるくくたが、笠をわんがらんがらす、そらがくんぐるくも、れんげれんげればっからふんごろ。

妓が情の、底深き、これかや恋の大海を、かへも干されぬ蜷川、思ひくゝの思ひ歌、心が心とどむるは門行燈の文字が関、うかれぞめきのあだ浄るり、役者物まね納屋端歌二階座敷の三味線に、引かれて立寄る客もあり紋日のがれて顔かくし、仕過しせじと忍び風仲居の清がこれを見て、「身をのがれがきたりける」。頭巾のしころを取りはづしく、二三度逃げのびたれども、思ふおてきなればのがさじと、とびかかりひたり悪洒落、「ごんせ」ととめたる女景清しころと頭巾、つい踏みかぶる客もあり。橋の名さへも梅桜花をそろへしその中に、南の風呂のゆかたより今この新地に恋衣、紀の国屋の小春とは、この十月にあだし名を、世にのこせとのしるしかや。こよひはたれか、よぶこ鳥、おぼつかなくもあんどのかげ行きちがふ妓の立帰り、「や小春様かなんといの。互に一座も打絶え、貴面ならねば便も聞かず気色かわるいか、顔もほそりやつれさんした。誰やらが咄で聞けば紙治様ゆゑ、内からたんと客の吟味にあはんして、どこへもむさとは送らぬの、いや太兵衛様に請出され、在所とやら伊丹とやらへいかんすはずとも聞き及ぶ。どうでござりやす」と言ひければ、「ア、もう伊丹く」と言うてくだんすな。それでいたみ入るわいな。いとしばなげに紙治様とわたしが仲、さほどにもないことを、あのせいこきの太兵衛が浮名をたてて言ひちらし、客といふ客はのきはて、内からは紙屋治兵衛ゆゑちやとせくほどにく、文の便もかなはぬやうになりやした。ふしぎにこよひは侍しゅとて河庄かたへ送らるゝが、かういく道でももし太兵衛に逢はうかと気づかひさく。敵持同然の身持。なんとそこらに見えぬかえ」。

小春にからむ太兵衛 かねてから小春を思い者にとねらう太兵衛は、その姿を追って色茶屋河庄に上がりこみ、金のない紙屋治兵衛などは紙くずも同様と、悪口三昧のからみ念仏。



人ごみにまぎれて小春が河庄に駆けこむと、女主人は愛想よく迎えて、

『ずい分久しぶりだこと小春さん。早くついたねえ。ちよつとみんな、小春さんが見えたのよ』

と中にむかつて呼ばれるので、小春はその袖を引きとめ、「すみません。大きな声で小春小春と言わないでください。外にいけない敵役の李踏天がいるんですもの」

とたのみこむ間もなく、その本人が二人の仲間を連れてずいに入つて来た。皮肉たつぷりの調子で、早速小春をつかまえてからみはじめる。

からむ太兵衛

「いよう小春。親もつけない李踏天とはいいい名をつけてくれたな。礼を言うぜ」

ぎよろりとした目で小春を見すえ、左右の仲間をふりかえると、「これ朋輩。かねてうわさの小春とはこの妓だ。床つぷりは上、心意気から人柄から、これだけの女はまずあるまい。今にこのおれが女房にするか、紙屋治兵衛が請け出すか、張り合いのまつさいちゆうじや。お見知りねがつておくがよいぞ」

とずけずけしたものの言いである。

小春はいまいましそうな顔つきになって、

「やめてください。勝手にありもしないことを言いたてて、それが傲慢ならいくらでもおつしやい。うちとはかわりのないことですよ」

と中に入ろうとすれば、ぴったりと身をつけて、

「小春。お前もよりによつて、たいした男をつかまえたものよ。天満はおるか大阪じゅうに星の数ほどある男の中で、よりによつて二人の子持ち、女房とはいとこ同士。舅は叔母婚、ややこしい血縁にがんじがらみにされているうえ、六十日六十日に間屋に取引の総勘定をわたさなければならぬ紙屋治兵衛。うんざりするほどめんどくさい相手をえらんで後悔しないか。あいつに十貫目近い銀を持ち出して、お前を請け出すなんてのは